

「田舎って、 どんなところ？」その1 目に見えにくいこと

リゾート
カントリーマーケット 里贈人

栗井 文子

春の日射が少しずつ強くなって、舗道や庭の土がどんどん見えて来て、確実に日一日と春らしくなってきました。ブラインドの隙間から漏れる陽の光も気付かぬ間に日毎少しずつ早くなって（眠たいよ！もう少し暗くてもいいのに）と布団に潜り込む時間の何と心地良い事。

先日、仕事を終えて帰宅した娘が「何かさ、今日昼休みに外出したら春のにおいがしたんだよね。」「ねえ、そう思わなかった？」と、言うので「春のにおいつて、いったいどんなにおいだったの？」と聞き返すと「うーん？何か上手く言えないんだけど、いつも春になるとフツと感ずる懐かしいにおいだったんだよね。何か、わかるしょ？」と

言われ、（うーん！何となくわかるような気がする）と思つた私。私自身、上手くは矢張り表現できないけれど、春・夏・秋・冬それぞれ季節を感じる香り（におい）ってあると思うのです。たとえば、野焼きの煙や落ち葉のにおい、牧草のにおいとか、自分の中に普段は眠っている記憶の破片がその香りを感じた時、フラッシュバックのように甦る、そんな感じ。

話は変わりますけれど、「田舎」や「農業」というイメージを考えたこと、貴方は有りますか？

私は、個人的には子供時代の母方の祖父の住む田舎は大好きでした。でも、そんな感情とは別に、普段テレビ等に映る鉢巻姿や、ムシ口旗で



粟井 文子（あらい ふみこ）さん

埼玉県生まれ。

大宮保育専門学校卒業後、江別の町村農場に実習したのが縁で結婚、就農することになる。

H7年に農水省が開講したグリーン・ツーリズム専門家講座を受講したのがきっかけで、H9年6月に自宅の一角に、直売所を兼ねた農業情報公開の店をオープンさせる。

農村社会のことを広く多くの方に知って貰いながら、興味・関心を深めて農業応援団を育てたいという思いから、H10年には貸農園も始めた。

粟井農園 カントリーマーケット 里贈人
江別市西野幌 127 番地 2

座り込んで米価値上げを要求する姿や、農協観光の一回が群れをなして行動している場面などを見ると、何か自分とは世界が違う人種をそこに見ている様で違和感を覚えていたのも事実でした。

結婚しても、しばらくの間はアンケート等の職業欄を記入する時は、「農業」と書かなくちゃいけないんだろうかとその時々「主婦」とか「自営業」と記入してしまい、後でどうして「農業」って素直に書けなかったんだろう？って自問自答してはみても、矢張り世間一般の偏見が私自身の中にも有るんだと言うことしか答えが見つかりませんでした。

娘の同級生のお兄ちゃんが中学校に通っていた頃に、何

度か友達とケンカをして、とても腹を立てて帰ってきたことがあったそうです。何かにつけ農業や、農家を馬鹿にするような口汚い言葉を言われた拳句「どうせ、お前ん家なんか、ドン百姓のくせに！」

その話を聞いたその息子の親は、「お前ら、いったい誰の陰で毎日食べていると思ってるんだ！農家がいなかったらお前らが一番困るんだからな！」と言い返して来い」と怒ってやったと言っています。その親の息子に向かつて言った言葉を聞いて、私自身目が覚めた思いでした。頭では漠然と理解していたつもりでも、体裁ばかりを結局私も気にしていたんですね。

子供時代、祖父母の田舎（埼玉）は、自分にとっての日常



からの逃げ場所だったのか
もしれない。土曜日の午後か
ら泊まりに行つて、日曜日の
夕方までには自分の家に帰
れば良かったのだから。祖父
母の家に居る間は、殆ど嫌な
ことも都合（自分にとって）
の悪いことも忘れてのんび
り、お手伝いという名目の遊
びをしていれば良かったの
だから…。

夢や希望で胸一杯の筈だっ
た結婚生活は、日常の生活の
場であつて逃げ場所なんかで
はなくなつてしまつていた。
夢と現実とは、あまりにも掛け
離れた生活だったのだ。親・
姉弟と離れる事は、覚悟の上
の結婚だったので、特にその
事で悩んだり後悔した事は無
かつた。唯一、心の底から後
悔した事は、友達との別れ

だった。「郷に入れば郷に従
え」の言葉を、それからは努
めて実行に移す様、努力も自
分なりにしたお陰で、下の息
子が保育所に入所する頃には、
地域内の同年代の友人も出来
た。町内のお祝いの席にも呼
んで貰えるようになった。

結婚時の夫の両親の約束も守
られ、一年間は通い作をした
が、その後は新居も建てて
買ってスーブの冷めない距離
で別々の生活も二年目からは
始まつた。

しかし、その当時から町内
の人からは、ここでは長い間
は農業は出来ないよ。市と用
地買収の話も出ているしね。
と言われていたのだ。都市近
郊の田園風景に囲まれた緑豊
かな住宅は如何？牧場のある
自然一杯の風景などという、



聞こえの良いキャッチコピーやイメージに惑わされ、そこで生活する人たちの日常も何も知らないまま、市街地に近い所から徐々に宅地化されてゆく農村。そして新たに移り住んできた人が、農業や農村と共存を考える前にまず出てくるのが苦情。苦情の件数が増えれば増える程、農家は、苦情の対象とならないような別の場所に移転を迫られます。田園風景も牧場のある風景も公書のように思われ、そこに元から住んでいた人々が追い出されてゆくのです。

たされています。多数決の原理がいつでも優先で、少数意見は無視もしくは否定されてしまうのが、今の世の中です。弱肉強食は動物の社会の掟かもしれないけれど、私たちは、言語と文化を持つ人間なので、

農村と共存を考える前にまず出てくるのが苦情。苦情の件数が増えれば増える程、農家は、苦情の対象とならないような別の場所に移転を迫られます。田園風景も牧場のある風景も公書のように思われ、そこに元から住んでいた人々が追い出されてゆくのです。

北海道に生活して二三年にもなりますが、未だに、農業者としては知らないことのほうが沢山あります。年輩の方の長年の経験から得た知恵や、宝物のような言葉に励まされ、時には伝統食なんかも馳走になりながら、やっとこの頃しみじみ幸せも感じられるようになってきました。

北海道の歴史の中におけるアイヌ民族を和人が騙して追い出して、片隅に追いやって来た時のように都市近郊の農村は、今同じような境遇に立

ITの時代だと、国をあげてパソコンだインターネットだと天気や作物の成長だつて、シュミレーション画面で予測



だつて出来る時代だ。だけど、今時の便利な情報機器なんかより、お年寄りの長年の勘や、雲の流れや湿度や古傷の痛み具合のほうが、大概の場合大当たりしているのは単なる偶然でしょうか。

農業は、自然相手の職業だから、本来なら風や土や雲や

言葉に踊らされ、目の前にある作物をじっくり手に取って観察する暇も、太陽が地平線に沈んでゆく美しさを眺める時間も持てないまま「働かなきゃ、食って行けんだろうが」と言う農業者の人がまだまだ多いけれど、本当にそうなんだろうか？

虫。それにお日様なんかともいつも真剣に向き合っていないくちやいけないような気がする。(優良農家の人には笑われてしまいかもしれないけれど)長年のデータも、研究もそれなりに役立つてはいる現実もある。だけど、大規模経営(スケールメリット)という

「働く」という言葉には人が動くことよって側(はた)の人が楽になる行為があるのだと、何かで読んだ記憶がある。戦後生まれの私には、戦前のことはわからない。でも、貧しくてもあの頃の生活や日本が一番良かったという年輩の人の声は良く聞く。

今、多くの人が働くのは単なる自己欲望の達成や限られた狭い範囲の人の幸せのためのように見え、その為に働いているように見える。それはそれでダメだとは言わないけれど、もう少し幸せを望む範囲の幅を広げたりして、地域に生活する一人一人の幸せや、この地域に生まれ育って良かったと思えるような、自分を取り巻く地域の人(側の人)皆が良かったなと思えるよう

な働きをすることが出来るのが、地域における農村や農業に与えられた秘められた本来の姿(力)なのではないかと思うのは、私の一人よがりや思い込みだろうか。

生きることは食べること。春に、おいがあるように、生きとし生きる者は全てにいがあつて当たり前とは、どうして思えない人が増えているんだろうか。そのくせ添加物や化学肥料やホルモン剤は使うな。安心で安全な食料を農家は、地産地消のために有機栽培や低減農業で作って下さいって、どこか矛盾しているとは思わないのでしょうか？

誰か頭の悪い私に知恵を貸して下さい。農家だつて自分や友達が喜ぶ顔を見たくて頑張っているんだもの。